別表５
(3)

主　論　文　要　旨

No.1

報告番号	甲　乙　第　　号	氏　名	鈴木　優

主 論 文 題 名：

フリードリヒ・シラーと文学の使命――人間形成における「美的仮象」の役割 ――

（内容の要旨）

1. 本研究の目的、方法と独自性

本研究の目的は、フリードリヒ・シラー（Friedrich Schiller, 1759-1805）の文学を通じた美的人間形成構想を歴史的・思想史的に再構成することで、その構想の中核にある「美的仮象」に対する新たな解釈を示し、現代における美的人間形成論の議論に寄与することにある。

本研究の第一の特徴は、シラーの美的人間形成構想を思想史的に再構成するにあたり、シラーの伝記的な時期と活動の区切りに相当する三つの段階から論じることである。第Ⅰ部では人間学や医学などの経験的な人間研究に取り組んだ初期、第Ⅱ部では1786年頃から1791年頃までの歴史研究と歴史叙述に本格的に取り組んだ歴史家としての活動期、そして第Ⅲ部では1791年以降の美学研究期を扱う。こうして、シラーの長い期間にわたるさまざまな分野での活動を、18 世紀の社会的・学問的状況の中に位置づけながら、シラーがどのような問題や疑問を見出し、またその問題に取り組もうとしたのかを再構成することによって、従来おこなわれてきたような『人間の美的教育について』（*Über die ästhetische Erziehung des Menschen*, 1795）の解釈からだけでは引き出すことのできないような、シラーの人間理解や人間形成の目的、そしてそのための媒体のあるべき姿について熟考する。第二に、本研究では、美的教育研究で十分に扱われてこなかった、「美的仮象」の条件や規範性の問題にも焦点を当てる。シラーが問題としたのは、理性と感性を媒介する芸術の作用についてのみならず、その作用を発揮するためには「美的仮象」がいかにあるべきかという、「美的仮象」の有すべき規範性についてでもあった。主体の持つ諸力を自由に活動させると同時に、何らかの世界像や理念を直観可能な形で伝達することのできるその媒体は、いかにして作られるべきなのか。現実からの距離化を特徴とする「美的仮象」の条件を熟考し、それを芸術作品として創作しようとしたシラーの意図に沿いながら、先行研究では不十分であった「美的仮象」の意味とその現実的意義の考察をおこない、最終的に、仮象と現実の二分によって現実的な意義を疑われてきた美的経験の積極的な意義を考察し直すことを試みる。

2. 本論の要約

第Ⅰ部の主題となるのは、シュトゥットガルトの軍人養成学校カール学院の医学生であった若きシラーの医学的・経験的な人間研究であり、またそれにより明らかになった人間像を巡っての、その後のシラーの葛藤である。18 世紀ドイツは、人間に関する認識の変化、「人間学的転換」により特徴づけられる時代である。研究の方法の実証化や心身の相互作用の追求、「全き人間」への着目、それに伴う「感性の復権」、世界における人間の位置づけや個体の成長、人類の文化発展についての考察、さらには「人間の使命」についての考察といったこの「人間学的転換」の傾向は、シラーのカール学院の卒業論文『生理の哲学』（*Philosophie der Physiologie*, 1779）、『人間の動物的性質と精神的性質との関係について』（*Ueber den Zusammenhang der thierischen Natur des Menschen mit seiner geistigen*, 1780）からも読み取ることができる。シラーはその中で人間の心身の相互作用を追求し、「全き人間」としての人間存在を明らかにしようと試みた。ところが、生理学や医学における実証的

主　論　文　要　旨

で自然科学的な人間研究を通じて人間を理解しようとしたとき、シラーは、表象や思考、そして反省などといった心的働きをも物質的なものの働きへと還元する唯物論的立場に大きく近づく。そのときシラーが直面したのは、人間の心的活動までもが身体の調子に依存するもの、他律的なものとなり、人間に与えられていたはずの「自由」が失われる、という問題であった。経験的な人間学は、人間の心・精神的性質に与えられていた「自由」を脅かし、完全性へ向けての精神の無限の発展という、キリスト教的、形而上学的な「人間の使命」と齟齬をきたすものだった。『菩提樹の下の散歩』（*Spaziergang unter den Linden*, 1782）、『諦念――ある幻想』（*Resignation. Eine Phantasie*, 1786）、『哲学書簡』（*Philosophische Briefe*, 1786）といったシラーの 1780 年代の著作には、この事実に直面したシラーによる、従来の形而上学的な「魂の不死」を前提とした「人間の使命」への懐疑と、その捉え直しの過程が記されている。

人間の存在と当為のずれをめぐって葛藤に陥った若きシラーに、そのアポリアから抜け出す道を与えたのは、第Ⅱ部の主題となる歴史研究であった。1786 年から 1791 年頃にかけて、シラーは歴史研究や歴史叙述に取り組んだ。イェナ大学での就任講演『普遍史とは何か。また、何のためにこれを学ぶか』（*Was heißt und zu welchem Ende studiert man Universalgeschichte?*, 1789）や、『モーセの古文書の手引きによる最初の人間社会についての若干の考察』（*Etwas über die erste Menschengesellschaft nach dem Leitfaden der mosaischen Urkunde*, 1790）からは、シラーの啓蒙主義的な進歩史観に基づく人類の発展史の理解が明らかになる。シラーは、歴史の出来事のうちに、「肉体という機械に規定された、自由を持たない人間像」を覆すような、文化を産出してきた人類の「自由」へ向けての発展史を見出したのである。つまり歴史研究は、「魂の死」や「精神の他律」といった、「人間の使命」をめぐる難問からシラーを遠ざけ、「人間の使命」の新たな、形而上学に依拠しない語り方へとシラーを導いた。シラーにとって、歴史とは、人類の自然状態から道徳的状態への「移行」過程にほかならず、歴史哲学構想とは、こうした人類の大きな発展史を描き出すことで、同時代の読者に、各自の「人間の使命」と「人類の使命」に寄与するための自覚と願望を与えるための手段であったことが判明する。また、過去から未来へのつながりを強調する歴史研究を通じて、シラーは次世代への文化伝達、そして「人類の使命」を達成するための、読者の人間形成構想を抱くようになる。歴史的著作『リュクルゴスとソロンの立法』（*Die Gesetzgebung des Lykurgus und Solon*, 1790）の内容や叙述方法の分析からは、シラーの歴史叙述が、古代ギリシャを過去の具体例として提示しながら、18 世紀の読者に対して、自身の時代にも通ずる立法や国家と人間の関係、またそれらと「人間の使命」（人類の目的）の関係を考察し、未来へ向けてより良い社会をつくることを促すための媒体であったこと、また読者の感性、反省的思考、判断力といった諸力を刺激し育成しようとする人間形成の試みであったことが明らかになる。

しかし、この「歴史を通じた人間形成」という構想は、1790 年代になり、フランス革命の進展を目の当たりにしたシラーにとっては、変更せざるを得ないものとなる。第Ⅲ部では、1790 年代初頭から 1795 年にかけてのシラーの近代批判の展開と美学研究を扱う。『ビュルガーの詩について』（*Über Bürgers Gedichte*, 1791）やその後の 1790 年代の美学的著作に見られるのは、「拡大された知の領域と職業活動の分離」により特徴づけられる近代社会への批判であり、結果として、そこに生きる人間の心的諸力が「頭脳と心、英知と機知、理性と想像力」へ分離され、別々にしか働かなくなってしまったことへの嘆きである。このとき、人間を再び「全き人間」へと回復させるものとしてシラーが掲げたものこそが、文学であり、芸術なのであった。こうして、分断され細分化された国家や社会の中でではなく、芸術家の手による「美しき仮象の国」の中で人間の感受能力を形成し、本来の「全き人間」の回復を目指すという「回り道」構想が掲げられることになる。本研究では、『美的教育書簡』でシラーが披露した超越論的考察と経験的考察をもとに、人間の自然状態から道徳的状態（「自由」）への「移行」が、美を経由することでなぜ可能になるのか、という問いに向き合う。これにより、シラーの美的人間形成構想においては、人間を現実的な諸規定から解放するという意味での消極的な「自由」と、世界の対象に自らが生み出す形式を与えようとする積極的な「自由」の実現が問題になっていることが明らかになる。

さらに、『カリアス書簡』（*Kallias, oder über die Schönheit*, 1793）を取り上げ、「美的仮象」の成立条件

主　論　文　要　旨

を追求したシラーの論を追うことで、この二つの自由の経験（現実からの解放の自由と、自由＝自律の理念の感性的経験）が可能になる場として、芸術の条件や規範性を熟考していたシラーの美的人間形成構想の全貌が明らかになる。シラーが芸術という技巧により目指したのは、日常的に内外の自然に制限され、また対象を何らかの概念や目的のもとに集約してしまう近代的な世界との関わり方の中で、人間が見失ってしまった、世界や対象との異なる関わり方を取り戻すことであった。それゆえに、芸術作品において表現されるべきなのは、恣意や偶然に支配された現実や、個や特殊なものに着目する「歴史的真実」ではなく、恣意や偶然をそぎ落とした物の真の姿であり、「現実」の背後に潜む世界や出来事の本質、「普遍的な自然真実」とシラーが呼ぶものなのである。こうした物本来の「自由」な（自律的）姿が実践理性により現象のうちに発見されるとき、それは理性自身の行為の「象徴」となる。つまり、人間はこの「自由の理念」を表す芸術を通して、素材の中に形式を、現実の中に理念を見始める、あるいは見ることを学び始めるのである。

まとめると、シラーの美的経験は、「現実からの解放」という消極的な自由を条件とし、これを通じて人間の内に「規定可能状態」を実現することによって、人間が現象界において「自由の理念」と出会うことを可能にするものであった。こうして、現実に向き合って生きていかねばならない人間に、「自己規定を示す世界との出会い」を可能にする、積極的な自由の経験を用意するという点で、シラーの美的人間形成構想は、人間の諸力に活動への刺激を与え、現実に戻った人間が世界を見る仕方を広げる可能性を持ちうるものとして想定されていたのである。